

## P-027

## 子どもの年齢別にみた母親の 育児ストレスの状況とコーピング特性 -子どもが3~4か月, 10か月, 1歳6か月, 3歳6か月の時期に焦点をあてて-

宮崎つた子<sup>1</sup>、本田 育美<sup>2</sup><sup>1</sup>三重県立看護大学<sup>2</sup>名古屋大学

## 【背景】

近年、児童虐待報告件数は増加傾向にあり、その背景に育児ストレス等が問題視されている。育児ストレスは子どもの成長発達に伴いストレス内容が変化するといわれているが、子どもの年齢別による母親の育児ストレスの状況やコーピングの特性の違いは明らかにされていない。

## 【目的】

子どもが生後3~4か月, 10か月, 1歳6か月, 3歳6か月の時期別の母親の育児ストレスの状況とコーピング特性の違いを検討する。

## 【方法】

2017年11月~2023年12月に東海地域A地方小都市に住む乳児をもつ母親を対象に4時点の追跡調査を依頼し、子どもが該当年齢になった各期に、自記式質問紙調査を実施した。調査内容は基本属性、育児ストレスインデックス(PSI)コーピング特性簡易評価尺度(BSCP)等を用いた。時期別に、Kruskal-Wallis検定、多重比較にて分析した。有意水準は5%未満とした。本研究は三重県立看護大学の倫理審査委員会の承認を得て実施した(No.170420)。

## 【結果および考察】

対象者は3~4か月の母親987名、10か月の母親712名、1歳6か月の母親544名、3歳6か月の母親284名であった。母親の年代は、どの時期も30歳代が一番多かった。また初産婦は約36~38%であった。4時点において、PSIの総得点、子ども側面の得点、親の側面の得点に有意差があり、子どもの年齢が高くなるにしたがってストレス得点は上昇していた。多重比較の結果、総得点では、3~4か月と1歳6か月、3~4か月と3歳6か月、10か月と3歳6か月の時期の間で有意差があった。子ども側面の得点では、1歳6か月と3歳6か月以外の各時期に、親の側面の得点では、3~4か月と3歳6か月の時期の間で有意差が認められた。さらに、PSI下位尺度では、子の側面の「親を喜ばせる反応が少ない」、親の側面の「親としても有能さ」と「退院後の気落ち」の項目には時期の間で差はなかった。PSI得点の結果からは、子どもが生後3~4か月から3歳6か月までの年齢が上がるほど母親の育児ストレス状態に影響を及ぼしていると考えられる。各時期のBSCPの得点比較では、下位尺度6項目の全てで有意差がみられなかった。母親自身のストレスコーピング特性は、育児中の子どもの年齢や成長発達による変化は少なく影響は受けにくいと推察される。

## P-028

## 産後ケアからつながる 地域子育て支援の実践 ~小児科医と助産師と母親スタッフの 協働、その利点と課題~

福井 聖子

<sup>1</sup>NPO法人はんもっく

## 【目的】

当団体は子育て支援のボランティア団体として、1996年から乳幼児の親子遊びや交流などの活動を行ってきた。活動を通じ0~1歳児の親子の孤立と子どもの育ちに危機感を抱き、助産師と協力し2020年7月より「街の実家事業」として戸建て住宅で0~1歳児親子対象の集いの場を開設、2022年5月より産後デイケア事業を開始した。専門職と母親スタッフとの協働による伴走型支援の実践と、その有用性と課題について報告する。

## 【方法】

集いの場の実践状況と、評価として利用者の参加者数、再利用率を集計、当日アンケートの声を集積した。また、産後デイケアの参加者には、市で行っている利用前後の質問票の評価を検討する。

## 【結果】

街の実家事業では、授乳の相談や母体の心身のケア、新生児のケアなどを助産師が、乳児期全般の児の発育発達状況の把握や関わり方の指導や相談は小児科医が担当する。栄養士による離乳食相談や睡眠コンサルタントの講座なども充実してきた。集いの場では、スタッフを交えた親同士の気軽な雑談や体験談などにより新規参加者も肩の力が抜けて、次第に打ち解けていく姿が見られる。利用者へのべ参加組数は、2021年度229組、2022年度669組、2023年度2月までで955組と年々増加し、2022年度集計の再利用率は60.4%と高かった。参加者の当日アンケートでは、「とても楽しかった」96%、「楽しかった」4%と好評で、「楽しく話ができ」「子どもが楽しく遊んでいたのが嬉しかった」といった場の楽しさに感謝する声や、情報や専門職のアドバイス、講座を評価する声も多かった。産後デイケアの評価については、現在集計中である。

## 【考察】

核家族化が3世代から4世代目に達し、自分の育ちの中で乳児に接した経験のある保護者は非常に少なくなった。祖母世代の就職率は高く、住宅構造の変化等もあり、実家の機能も低下した。産後ケア事業が開始されたが、施設としては病院が多く、ハイリスク妊産婦や早産児が主体となっている場合も多い。当団体では乳幼児親子への支援として親同士のつながりづくりを目指してきた。疲弊して産後デイケアに来た参加者が、その後集いの場を利用して親同士のつながりの輪に入っていき様子を見ると、地域連携につながる支援の重要性を改めて感じている。公募助成金に頼る現状と課題も含めて報告する。